



奇說排悶錄

後集

五

特別
〜21
2460
11



尾定

奇説排門録卷之十

仙縁之部

目錄

尹鬢頭

王探花

蕪姓

楊忠烈

李焯

成御史

汪希文

非門録卷之十

2460
12-11

久^く歸^{かへ}りけりぬ寂^{さび}としく見^みえり^や。歸^{かへ}来^きく尹^{いん}を責^せく^や。詭^{ごう}を説^とく^やと
云^いへ。尹^{いん}が曰^{いは}公^{こう}曾^{そう}て路^ろ上^{じやう}の道人^{だうじん}の醉^{すい}たる^や。酒^{しゆ}瓶^{びん}を枕^{まくら}め^てと^も睡^{すい}る^者を
見^み玉^{たま}ひ^くる^や。公^{こう}曰^{いは}く^や。尹^{いん}曰^{いは}く道人^{だうじん}瓶^{びん}を枕^{まくら}め^て西^{さい}の口^{くち}相^あ對^{たい}せる^を。
分明^{めいめい}に呂^{りよ}字^じあり。公^{こう}自^{みづか}悟^ごらむ。何^{なに}ぞ我^{われ}を詭^{ごう}を説^とと云^いふ^やと云^いふ。此^{こゝ}又^{また}
於^おく人^{ひと}を四^し路^ろ又^{また}遣^やく。之^{これ}を不^ふ見^{けん}む^{こと}も。皆^{みな}縁^{ゆかり}に志^しく未^ま遠^{とほ}く^やと
云^いへ。其^{その}行^ゆ方^{かた}を^も見^{けん}む^{こと}と^もか^ん。若^{ごと}く一^{ひと}貴^き人^{にん}の閨^{けい}女^{にょ}の^も。重^{おも}き病^{びやう}の^も。
容^{よう}瘦^{しゆ}く^も苦^{くる}し^もあり。名^な醫^い皆^{みな}効^き無^なけ^きを^も。母^{はは}愈^いむ^{こと}と^もく尹^{いん}を^も。
視^みせ^られ^ば尹^{いん}が曰^{いは}く是^{こゝ}は^も病^{びやう}虫^{むし}あり。尚^{なほ}醫^いす^べし^と云^いふ。貴^き人^{にん}何^{なに}の^も藥^{やく}を^も。
用^{もち}ひ^んと^も向^{むか}へ^て曰^{いは}く藥^{やく}力^{りき}治^ちする^も。只^{ただ}我^{われ}と^も同^{どう}宿^{しゆく}二^に夜^やせ^ば便^{べん}好^{こう}し^ん
と云^いふ。貴^き人^{にん}大^{だい}怒^どり^し許^{ゆる}さ^む。後^{のち}女^{にょ}の病^{びやう}日^ひ々^じぬ^れの^も。萬^{まん}一^{いつ}を

生^なべ^た理^りあ^らな^し至^{いた}り^し。母^{はは}泪^{なみだ}あ^らう尹^{いん}が^も夏^{なつ}を^も云^いふ^べ。貴^き人^{にん}之^{これ}を^も許^{ゆる}
り。尹^{いん}女^{にょ}の室^{むろ}入^いり^し少^{すこ}し^の穴^{あな}を^も皆^{みな}紙^しの^も糊^かし^と張^{はり}て^も。錢^{ぜに}を^もの
穴^{あな}を^も遺^いさ^す。一^{ひと}榻^{たた}を^も設^{たて}て^も帳^{ちやう}を^も用^{もち}む^{こと}女^{にょ}を^も其^{その}袖^{そで}衣^いと^も去^さら^しめ^り。
手^てを^も以^{もち}て^も足^{あし}を^も摩^さす。心^{こゝろ}極^{ごく}く^も熱^{あつ}する^も。火^ひの^も如^{ごと}く。摩^さす^も女^{にょ}の陰^{いん}戸^この^も左^{ひだり}右^{みぎ}
み^みぬ^る。叔^{しやく}睡^{すい}ら^んと^もく女^{にょ}の戒^{かい}と^も云^いふ。喉^{のど}より^も虫^{むし}有^あり^し出^いで^し。急^{いそ}に^も我^{われ}を
呼^よべ^しと云^いふ^べ。睡^{すい}や^しと^も。鼻^{はな}息^{いき}わ^らう^も雷^{らい}の^も如^{ごと}く^も。声^{こゑ}を^もあ^せる^も女^{にょ}の^も。
眼^{まなこ}を^も合^あせ^ん。天^{てん}明^{めい}ん^とす^る。此^{こゝ}女^{にょ}生^なじ^し。虫^{むし}口^{くち}中^{ちゆう}より^も飛^と出^いつ^とと云^いふ。尹^{いん}記^きて
四^し方^{かた}を^も不^ふ見^{けん}る^も。尹^{いん}が曰^{いは}く何^{なに}處^{ところ}より^も飛^と出^いつ^と。定^{さだ}めて^も二^に人^{にん}を^も害^{がい}せん
と^も云^いふ。此^{こゝ}夜^よ女^{にょ}の乳^{ちち}母^ぼ放^{はな}心^{しん}せ^るを^もけ^し。一^{ひと}孔^{こう}を^も開^{ひら}いて^も窺^{のぞ}居^ゐる^も。病^{びやう}
虫^{むし}已^いに^も乳^{ちち}母^ぼが^も腹^{はら}内^{うち}ぬ^れ。父^{ちち}母^ぼ之^{これ}を^も視^みる^も。女^{にょ}の靨^{えん}色^{しき}已^いに^も変^かへ^り。

非^ひ禮^{れい}録^{ろく}卷^{くわん}之^し下^げ

尹笑とく去るぬ。後數月女塔を擇める時あつて乳母を果して死ぬるせたりとぞ。又茲に賈あむ。婦を娶りたるが。尹偶其家に至る。婦を以て急ふ走るも。抱はれ其頸を咬む。舅姑驚き隔と引のけられ。尹歎息して曰。恨べ。面股を咬断つ。尚一肢あり断まをのふせんと云るを。皆何の爲か言ふを。知者あり。後夫婦不和あり。妻遂に自縊して死ぬる時。二股の繩僅に一肢断せし。死するに至る。人其先見ぬ股一あり。府尹尹が仙跡露を乞ふ。人心を惑乱せんとも。押使を添へ華州へ歸り遺らんとす。監押の軍人云我等押發毎に常例あり。銀を乞ふ。料るに汝銀錢無ららん。我妻子何を以て過活せんと云ふ。尹曰。汝が家内需る

所を柴と米とを過ぎべ。何の辨し難き事あらん。汝に兩符を與へん。一は灶上へ貼す。一は米桶へ貼す。用る時自足らんと云る。後柴米共不用とも盡せり。軍人華州より歸りて後柴米を用んとす。共偲ふ盡く有らざらん。鬘頭其より華州の鐵鶴觀中へ住す。鐵鶴の騎りて天昇りると云ん。

王探花

明の翰林館王公教を字を雲芝と云たり。新城郡歷城の人あり。成化二十年甲辰の進士及第。進士及第の第一あり。諸生の時書を讀く。牛山寺の臥を在ら。夜地上へ火の光あるを以て。發見し。石匣を得り。中へ書二冊あり。是を讀て。より風御し。

神を出し。未来の吉凶を知る類の通を為す。此公平生異言
 甚多し。嘗て僧と枸杞を采り山に登り。僧先づちと山を
 下りて門を叩け。公已先在て肩を啓く。僧大驚。驚
 多し。河南四川各地。各督学の官。獄日書生院の窓廡を
 鎖さんとする。窓廡の中各一公あり。危坐するを見ける。一日白雲
 一片を日空。騎命し之を追ひ。雲地は落く化し。石と
 あり。其色雪の如し。煮て食へ。其甘事館の如し。公の
 曰。此雲母也。輝縣山と云山は行。輿を下り拜して曰。丈
 此ぬき。地を掘らせ。奇石を得。是を百泉書院
 置ぬ。又道の左なる古垣の中。紫石硯二枚を得。各鴛鴦

雌雄相向。嘗て云。我目め。大地竹師眼の如し。
 凡異寶埋。皆んゆ。枸杞を采。僧病。終小
 臨る時。公其欲。牙と問。僧云。富貴之を兼ん。事を
 欲す。公曰。但一藩王と作る。不堪たり。朱の
 其背。蜀王と書。王命二子を生。時。背。上。隠。其
 字跡。尹恭簡。又云。人病。臥。人。足。訪。公
 大鶴。室。飛。旋。賜。去。此。公。の。神。
 終。南。各。地。の。困。子。祭。酒。官。たり。預。死。期。を。知。身。終。時
 四。城。門。の。人。皆。公。の。羽。衣。鶴。尾。を。着。去。り。往。雲。水。道。人。の。如
 き。又。郷。人。の。良。舞。道。中。を。往。者。あ。道。吹。の

声南より来りて遇ふ。之を視て公めぞ有る。

蘇姓

嘉靖年中。蘇錦衣が馬僕。蘇某と云者あり。柳の陰に臥居たり。一道士通りのゆりて。足先めて起し。曰。汝が面何ぞ陰徳の紋。又云。蘇曰。貧人あり。陰陽の成まらぬ無し。と云。道士強く向ふ。曰。平生蜂蟻馬牛の類。皆力を極く愛し。護りて。其生を殘し。其力を盡さぬ。食を得るの極め。難き婦と積。鐵を療す。夏を得。其餘。巧者。與ふ。市。平生未嘗。飽ま。食せる。蘇。と答ふ。道士曰。是。み。の。そ。わ。我。の。隨。て。と。云。其居所。至。松樓柏殿。白鶴。青。鳥。あ。て。皆

人間の物。蘇の悟。踏踏呻吟。曰。今日主人の馬草の飼。無。罪。我身。あり。且我妻。明朝の食。無。け。碎。て。ま。る。と。あ。ん。と。云。道士嘆。曰。汝。福。無。し。必。歸。ら。ん。と。欲。す。と。云。明朝。至。破。草。履。一。足。と。藥。一。粒。を。出。し。之。を。授。け。汝。あ。ん。と。云。京。の。歸。る。と。云。蘇。辭。し。去。京。抵。る。乃。の。其。城。門。を。見。て。北。京。の。非。む。蘇。驚。く。何。と。あ。り。と。問。門。卒。云。此。を。滇。南。地。省。の。城。あり。と。云。蘇。哭。く。曰。道士。我。を。陷。し。滇。南。を。京。を。去。る。夏。萬。里。の。路。あり。死。一。錢。無。し。何。に。由。て。達。る。夏。を。得。ん。門。卒。其。道士。の。状。貌。を。の。ん。何。物。を。の。く。汝。に。贈。り。と。と。問。蘇。其。状。を。言。ひ。又。藥。と。屨。と。を。與。へ。夏。を。語。り。門。卒。曰。此。を。我。張。顛。仙



革本繡像摸寫



馬僕藤姓一
道
士に起るま
て仙
境小至奇丹
を受る所

あり。汝輕々しく之を棄つ。然共二寶あり。何ぞ帰がく死るのみぞん
 我のふ宿し。數日を等す。汝が為ふ衣の泥を洗はん。と云ふ。蘇之を
 皮と始と仙人ある事とを悟らぬ。又何のふ已が寶を奪のよやせん。と心
 ばき。即時に辭して其所を去。客店に宿り。明日ありて。屢
 と着て。おのめが白雲中を行ぬ。耳ののた。颯々たる音を聞のき。薬を
 以て口中の含け。を聊に飢ず。一日に千餘里を往く。遂に七八日。京
 へ到り。着る。餘れる薬を以て。婦の啖ひ。主人。顛仙のよより來り
 すと。便に。馬を蓄せ。し。夫婦を養ふ。壽皆百歳。近
 て卒しぬ。主人其屢を着。園中を行け。飛ち。ゆ。有る。蘇卒
 しく。遂に屢の在所を失り。と云や

楊忠烈

大洪鈿の楊先生連と云人。微より。楚の名儒あり。京の
 學問の試す。後其撰入る。わ。と待る時。及第の
 告く。來る者あり。時食。在る。哺を合。出。楊某ありや
 否や。と問ふ。彼者無と。合。心も消る。如。食を嚙。扇
 入。遂に病塊と成。壺阻甚。苦む。衆勸。駕。遺才録
 病を愈さん。苦め。之を求。と云。去。臨。詩を贈。日。江邊
 柳下三弄笛。拋向江中。莫歎息。の句を唱。扱。翌日。途。

果して道士の柳下ぬ坐せるぬ逢ふ因と哀ぬ疾を告ぐ清心道
 士笑と曰子悞る夏甚し。我何ぞ能病を療さんや。請三弄と為
 して可ちうんのもよと云と笛を吹て吹く。公甚うん一如く又も
 愈拜しと切ぬ末め。且囊と傾と金を出して之を釈す。道士金
 と接と前あり流ぬ擲ある。此金人の贖めと與へる物ゆと若所
 たる毛かたぬ。大ぬ駭馬と惜と悔けと。道士曰君のまご此金ぬ
 心残るや。金々江邊ぬ在る。請自之を取ると云公請と視とを
 果しく其俸有る。益奇ありとて呼と仙と稱しけと。道士
 漫ぬ指とて曰我と仙ぬ非ず。彼處より仙とまると云公回顧
 とて強く其項を拍て曰。俗ある哉公拍れと口を張と声と作せと。

喉より一物を吐出とて地ぬ墮せり。俯して之を破ると血
 糸の中ぬ昔飲とる飯包とて存せり。病忽とぬるが如し。頭と
 巻と道士を視と。已ぬ杳ぬとて云と。

李焯

李焯と字を振雅と云と長垣地の人なり。萬曆年甲辰の進士
 道術を好む。ツの不灰木を火爐ぬ蓄ふ。爐中香の烟自起る。府
 呂洞賓其室ぬ降て共ぬ晤言とる。終夜あり。唯一人小僮の
 之を奴とる。餘人の耳ぬ入とす。青州國の知府ぬ官とる。府の
 後と園あり。前々の守園ぬ遊ぶ者も輒病はせけと。恒ぬ肩と
 鐺を下してあり。焯園ぬと周く視て曰。他と異あると。唯荷

池中の萬金を瘞てあり。此崇を為らるると云ふ其二人の子之を
發うんと請へて。焯が曰。金の柴寅寅實が各字を鑄たり。吾何安よ
取らばんやと云ふ。復其門を局し封を成し置ぬ。柴寅寅實と云
人も長垣の人あり。此も進士より也。其時某の縣を知らず。一日
李焯公堂に坐し。城南地の雲門山に對て在る。何夏と獨
言し。叔二人の隸を呼ぶ。曰。南山某の處に西の狼あり。一の擔夫
を厄也。亟に往て救べし。緩くば乃ち無らん。と隸命を受けて
馳往す。南門の外に至り。一伎館を過て茶を索め飲み居りた。
焯堂上坐し。忽怒を發し。曰。吾嚴く諭戒めたり。彼者
伎館を掩留するやと云ふ。曰。吾をたを遣て偵らば。果して伎館を

在り。知府の言を述べられ。大に驚き。急ぎ南山の下に至り見
れば。一擔夫西の狼と闘ふ。力盡てやう。斃さんとす。遂に力を協
て。二の狼を殪し。之れを擔夫もかた命をぞ助る。其神異往々
元此の類せり。郡に在る疾疫無し。てわりの。一日二子を召て曰。呂仙
我を召べり。我まふ逝んとす。と云ふ。遂に卒し。ぬ。年五十二あり。後
十四年柴寅寅實果し。青州を守り。池を發て。藏金を獲る。
富邑中第一と成し。柴歿し。其子守る。能はす。竟に歿落
せりと語傳へたり。

成御史

前の御史。樂安各地の成公寶。慈勇也。明の崇禎年中。疏を上げて

黄公石齋がむらの罪を故を以て責を蒙りて論成夷の境に流罪の身と成る。清朝天下を得て後崑崙山中に隠して居ける。一日大雪降る時絶頂に登り遙か松林の中を這入り人有るを視てのり意を凍死すべしと趨近つたを視て四面皆雪積て人の跡も無き此の木葉を衣とあり臥居るが居る處一丈をその中聊も雪あり公の至るを待て起て曰我公を俟良久と云其年を問を恨めおえぬ但少き時京師に在て楊椒山が罪をて西市に赴き斬らるるを免て遂に憤を發して出家して道成学びしる。向ふ左羅石沈周泉の二公に見えくる毎に公を薦て自代らんと欲しるが沈公が曰成公を正人あり嘗て我を疑へり今

其疑釋ゆるらんと言きと云ふ成公之を驚く惘然として曰昔沈公疏を上げて漳浦を論し書を遺りて我に及べり我答ざるか此事人の知る者あり誠りて授けらるると云ふ道人又云長生の術あり公は授べると云ふ公の曰吾も陳人あり速に死するを以て幸とす長生して何をも為さん道人云聊公を試みはるあり今より後二年を過し清明の日當に二公を偕て公を候べしと言ふ謝して去りけり歩むるの飛が如くぬぞある公果して康熙戊戌年清明の日に至りて病ありして逝ぬとあり

汪希文

汪希文と歙縣の各人あり少して尹鑿頭と遇て隨ひ侍るる久し

之が為（こ）子（を）抱（き）か（ど）と（え）し（り）。蟻（ち）虫（ち）戸（と）を（お）か（ら）ぬ（ま）至（る）て（は）。輒（す）土（を）
 虎（を）坎（と）と（る）と（く）。其中（に）蟻（を）。雷（の）聲（を）と（發）ま（る）時（に）始（め）と（起）出（る）り。
 康熙十年某の縣令の子。病篤く瘡ささかひのまると云ふ。乃ち其の醫
 師を皆謝しと云ふ。昏使（が）云某の仙人能此疾を療すべし。若
 其齋孫（を）因（り）と（き）禮（を）と（以）て（度）で（請）ふ（と）至（す）と（云）ふ。其言の
 如くし（し）果（し）と（至）る。令夫婦香を焚て跪き拜し呼ぶ
 仙人を以てす。異人（を）を（揺）し（避）て（取）て（當）ら（ず）と（謝）す。其子（を）
 出して（は）口（を）せ（ら）る（ふ）。ほ（ろ）く（視）て（害）あり（と）云（て）命（を）と（吐）室（を）と（作）ら（し）
 び。飲食（を）と（通）る（と）。虎（を）と（作）り（て）。被（子）を（誘）て（土）室（に）入（り）其（戸）と（扇）家
 人（を）戒（て）潜（に）窺（む）竟（と）得（ば）く（む）。五日（を）過（し）と（戸）と（擊）手（を）聲（を）也。

其肩（を）啓（け）け（ば）子（が）来（り）つ。其形豊腴（で）平時（の）如（く）病瘳（と）愈（え）
 たり。父母之（を）向（て）云（ふ）初（の）時（に）兩人皆坐し。背（を）と（ひ）と（抵）る（と）。
 其背熱するの火の如く（なり）。時動（く）と（さ）と（戒）む（が）て（又）
 足の（を）と（抵）て（臥）さ（る）。足（の）熱（する）の背（を）と（甚）し（か）り（と）。
 遂（に）精神（を）至（し）と（肌）肉（を）復（生）と（し）。沈痾（の）體（を）と（去）る（と）。何（の）時（に）も（を）
 知（ら）ず（と）。合（ふ）令（夫）婦（の）喜（び）。壁（を）と（物）無（し）。金（を）と（以）て（謝）せ（ん）と（い）ひ
 け（と）と（受）む（と）。より（と）布（を）と（送）ら（る）。其中（に）四（疋）と（取）て（辭）し（と）
 太（ろ）ろ（と）途（を）と（巧）者（を）と（見）し（と）。足（を）と（投）て（ぬ）と（せ）る（と）。郭門（を）と（出）る（と）皆
 遺（す）と（無）と（り）。今（此）人（を）と（添）と（く）遺（け）と（井）。行（事）風（の）如（く）。
 奔（る）と（馬）と（似）て（及）ぶ（る）能（ふ）と（云）て（歸）て（報）け（と）。令（歎）息（し）と（て）

排胎録卷之十

十二

止さるひや。其貌五十計の人と見えたるを。

薛衣道人

薛衣道人と云へる。姓を祝名に竟民。字を巢父と云ふ。洛陽の書生あり。少くも文を以て名あり。明亡て制書と棄て醫と成て。自薛衣道人と號けり。仙傳瘍醫の術を得る。凡諸の惡瘡其藥少計を付し。立どころに愈。若くは脛を斷臂を折者。療治を請ふ治せざるもの無し。或は腹を刳腸を洗ひ。腦を破り。髓を灌おどする。華陀の各醫が術の如く神あり。里中め賊の首を斷り。者あり。其子醫の神あり。を知て家人は謂て曰。祝巢父の仙人あり。速に我為に請て來と云へ。家人曰。郎君の言妄あり。願は頭を連ねざる

者。縱彼の魂と返すの丹藥ありとも。いづれ能形骸の離るるを治す

べんや。其子強く之を呼ぶ。竟民至て其胸を撫して曰。頭斷る共此尚

暖氣あり。暖氣を生氣あり。生氣の尚治まると云て。急に銀鐵を

以て其頭と項とを合す。縫ひ塗る。未藥を以て。火火して。尉

夏膏を以て。人參湯を煎じ。他藥を雜へ。其齒を啓せ。之を灌入

ける。須臾より鼻は微く息出たり。復熱酒を以て。飲ある

一晝夜を過し。其子を呼て語る。乃糜粥を作て進む。又一晝夜

て手足と養あが。七日を過し。創合し。半月を経る。故の如く成ぬ。

家擧て拜謝し。願ひに産の半を以て酬せんと云へ。竟民受ず。之

去ぬ。後終南山に入り。道を修し。終る所を知ら。子無く。其術傳

らむとせん

趙如如

蜀の人の趙如如と云者なり。髯長く軀偉なり。明の時邊將と爲る。將となり
 と成て已ぬ難ぬ死せり。康熙癸卯の年崑山の何英と云者。浙河の衛
 州ゆく趙如々々往過けり。何英鬼あらん疑て恐る。趙如と云者。趙如
 如云吾と子と異姓の昆弟の如し。吾道を學びしを知らざりし
 うと云たり。趙如如平生天紋術數の學を精く。兼て五行選法を習へり。
 其難を殉つる古人の仙と爲り。尸解せる者の如く然也。叔後何英天
 雄地の別駕宿と爲りけり。趙如々々も信は北邙して往ぬ。常ぬ一の黃帝
 道袍を着て居ける。寒暑共脱易る事なり。飲食を爲さず。唯ひこころ

酒をのみ飲たり。何英急のるゆり。人を楚國と遣んとする。趙如々我
 代て往べしと云。其札を括く晨ぬ。其暮返來ぬ。賈所の回文小押
 たる朱印。猶濕くのりしと云。辛酉の年保陽地名往る。時の撫軍官
 大は賈客と謙し。一の王盤と高座供へり。趙如々近ばた進ま。王盤
 と取て之を碎く。撫軍大は驚く。趙如々笑て曰。子鐵輔の大臣ぬ。在
 るら。何ぞ氣度の廣く。王盤と後苑の井の中在り。往て之
 と云ふ人を遣く。王盤本のまゆめてあり。趙如々を見ら。何人
 往し。王盤云。是より遂に復人間に遊べ。甲子の年。容並日陀山を
 至る者なり。趙如々。何氏ぬ贈る書を持て來ぬ。其文云。我近あり
 南海に存く。道を修せり。子。眞相はゆんとする。必往づと云とあり。

然と云々何英聽くむして往々荆州に至りて遂に卒ふなり。

松祖

平望里地は楊碩甫と云者ありけり。父を遠き國に往て盜み遇て之を
刀ゆき断らるるが幸うして死せずして有る。楊碩甫之を以て自
臂を研て筋骨を断り。家至て貧し。或人は二年銀八両のみきめて請
納せしむ。其子の学文を仕入る。二月ちて其寡孀病
て死にたるが子もあがりけり。楊碩甫主人に請て件の館金の中四両を
先借し棺を買んとするを主人許さず。楊怒て衣を拂て去りぬ。叔父
も心ちて道と往る一人の叟に遇り。野服してかみとびくを。叟楊に向
て曰。二十五里一株松。爛却芒鞋。此是踪と言て去りぬ。楊碩甫復ありげに

思て老人の言の如く往る果しと大きき松の根石のり。其上

小爛まする芒鞋のり。取て視る四金をぬり。持歸りて棺を買て葬せ

る。然と云々楊住れた家かけし。今てひ前の叟に逢はん。其を以て

山林幽僻の地をそのまうとあくたを歩ゆる。數日あらずして

叟に遇ぬ。叟が曰。吾今の姓を松名八年と云へり。汝が曾大父と云ふ

同く遊びた。其時の姓名を汝に告ぐる。乃ちと云て。遂に挈て山深く

入る。凡百里を往る。長き松百株をわけて三間をりの草屋

あり。四面壁無き。風雨のり無し。中石の几石の甕を置く。小

童のり。側侍し居て共黙し。一語を發せず。效の声もせせ。毎

日午時童子米一盃と淘て進む。松叟指を以て之を割す。中より



革本
 繡像
 模寫

掛屏
 金卷
 卷之十

十六

分りて二とあり。其俸飯の煮て熟すまじきと。相雑るるの無し。叟と
 童と其半を食ひ。楊ぬ其半を食うむ。飯の香なるの言べくらず
 半碗の満まじきと。之を食へば一日一夜をふと共饑す。此米何くもり
 取ぬ来ぬら知らまじき。飯を食ひ訖まじ各跌坐し寂然として動さ
 揚碩甫夜睡らんと欲しけり。松葉を藉て臥さむ。隆冬の法と
 雖寒きものあり。叟青布袍を衣て居り。左の袂恒々下ぬ垂て左の
 てを露まじのゆらむ。楊竊ぬ之を窺へば左の身を以て臍下を掩ひ
 無名指の甲長く延て其腹を遠る。夏七匝も扱揚を留るるの旬日
 をくりしと語て曰。汝太べし。汝貧あれば筆を賣る活をかせはぬ。十
 金を與るむ。湖洲又往く。二銭を以て十枝を買ひ。常熟地名に至て

賣るる三銭を得る。一とびの性返る五金の利を得ん。是れ女を贖
 せぬ足まじり。利少とく募る事あり。筆も佳を賣買べからん。必常
 熟に於てせよ。他又往るるも是れ。汝此後名を賀公遠と改よ。慎む吾
 言を守らる。常ぬ山中ぬ至る。若戒る所又たがらぬ。なまのを得
 トと云たり。楊酒を嗜て戯まじ。のそ有るまじ。人皆癡とくけまじ。も
 少ぬ入る。仙と遇へり。とや争て哀を著し。吉内を訊ふ。楊是れを
 叟が前又置べ。叟視もかむ。とく盡く之を焚き。十日又を二月を
 うむ。留居る。楊帰らんとする時。叟指を水ぬ蘸し。石の几の上ぬ字を
 書す。小童楷墨ぬ之を写し。一ツの雜く之を投與ふ。山を下り
 箇より探ぬ。其まじ人ぬ応る。吉内中らるるの無し。乙酉丙戌の

間更揚ぬ語。日吾將小粵西小往んしす。故又山に至るるありきと
 云り。揚それより後仙の教小隨ひ賈よのそ公を入と大賈と成て。
 多々妾婢を置と復山小入事とす。達者例の吉凶と向んと強と
 更と尋往しむる前の山の登りける道と迷て往つた方を知らぬと
 けり。此時の當て臨桂伯官瞿公と云人粵名國を撫定しと在し小。
 靖江地王靖江の兵を起し。臨桂を囚て舟中小置き餓し死さんと欲せ
 然る小毎日午時の法香飯の甌と半小を盛たるが。艦板の上小置と
 ぬと。臨桂之を食て終日終夜餓るる。揚が説所の山中のさまの如し
 九二十五日と經と。靖江王敗まると。臨桂免るるを得る。追人仙仙翁の
 貌を揚ぬ記て。像と作て之を祀と稱とて松祖と崇めけり。

羅道人

羅道人羅道人家を棄て江湖の地の間遊ぶる。十餘年をまして歸と。
 江夏山の中小住む。後又衡岳各山の麓小茅を結べり。宅小垣を作らむ
 堂小戸を設す。床小竈も無く。藪を断て坐し居る。斯くと居る更
 十餘年あり。身に青き毛長くと生と。望むる小烟火中の人は非と
 客至るるのの惟云。巨と為ての忠と辱し。子とて六孝あり。是大道
 あり。藪を辟修煉するあり。其の其のと云々。人衣食を餽と皆却て
 受む。強くと留て往人の食を小猿鳥小食へり。衣と石の上の其
 儘置はむ。白腐て跡も無るあり。其の其の虎狼の窟めしと。
 荆藤徑を塞けむ。之を訪人蒙茸を披と入る。虎狼小遇へ共害を

ちるまで。其山を熊羽經と云者の持る所あり。羽經病復ヨリて有けん
 糧を具養て山入る。道人は隨侍し。數日居りし。病少く瘥る。
 羽經云く。夜半の比道人何方へ往ぬ。出往て日高て歸來する。日高て志
 身露は沽てのりつと語りけり。其後訪者ゆきを絶て共々語らむ。訪
 者も日くは稀り成ぬけむと云る。

嶗山道士

嶗山の一名を嶗山とも云へり。即墨各地の界ぬ在り。山中二百歳の人
 多あり。高密各地の張生と云者。道觀の寓す。書を讀む時老たる
 道士の貌醜き。木を刈草を取事し居る。張意ぬ勿心
 居る所。一日二匹の牛を買る。張が家山を去る。百里餘の踏

ひとし。人を牛を引き往者無み。思ふも。彼道士張の
 來く。君思所の似たり。牛の故る。吾君が為ぬ牛を送り遣
 らんと云ふ。張其言を異なり。と。中ぬ牛勿心。張
 せありぬ。張生日を過く。家ぬ婦。家人ぬ問け。家人曰。某日某時
 道人二牛を送り。と云ふ。其時を憶ひ。山中ぬ立て。道人と
 物語せ。時と同頃あり。依て非常の人あり。度を知て。大之を禮せり。
 又一日張其門弟を集て。周易を講し。居る。道人窓の外ぬ在て之と
 聽く。呼く。曰。君が述る所皆俗説あり。と云ふ。試ぬ之を問へ。各理人意の
 外ぬ。張生其学を受。遂に易と説事を以て。東方ぬ名を禮す。
 せり。一日夕暮の法大雨あり。雷電しく恐ろし。かりけ。張生門を

用て居る。念の際より見まが。天神數百輩。道士の房外に圍て
立て。禮を作せる状をみせり。張生驚き恐る。声も立てず。夜を
明くも。曙も成て兩止り。門を用て往て視る。道士の門扉も
寂しく人無し。此夜山中の道觀數十百處。皆道士を召し來り
無るなり。

宋道人

宋道人の長治驛の人なり。幼此孤となり。頼む方あり。人の為
羊を救く霍山の中居る。一日羊の逃れ。往方無き。けしを
數々の羊と牧者傍徨と途を失ひ。宋年十三なり。獨深山に入
て之を求る。行事二日。うらうら人の老る僧の瞑て石窟の中坐

せるを見る。四方人跡無し。僧の面黄毛生て二寸さりの。心異人
ありと知く。曉て其故を陳け。老僧目を張り。曰。汝が羊固在。
中秋と待たせ。今且歸べ。と云。宋歸て残の牧者告げ。其
其期も及て引連て往る。果しく羊を得たり。此時外に羊四五
頭をぬけり。老僧を尋け。もも見え。りけ。衆人議しく其餘の羊
を鬻んで百金を得たり。既め。金を分る。平る。おと。異論を
云者有て之を官に聞。官其金を宋が物ありと判。と度す。
其徒の中。王姓ある者あり。宋が金を拵るを利と。口を
ぬけ。宋を誘ひ。金の口入。と。か。ん。あ。を。偽
て。夜。宋。が。居。所。に。已。が。婦。を。入。り。後。より。ほ。り。入。來。て。姦。夫。を。と。呼。て

宋を逐知し。財を王姓小取らましく依る所なく。又山に入りて住る。遙き所に至る。一の茅菴ののゑを見る。内は彼老僧居り。宋拜して泣々故を告げし。留めし。焦せり。久し。之を許せり。老僧多く食せむ。厨中のみ有りの。惟燕麥芋魁のみ有り。宋之を食て飢む。斯く五年を居る。老僧宋を勸て山を出よと云へ。宋留り居る。老僧の曰。汝實法ある。其性鈍根なるを如何せん。汝壁の上の畫る古丈夫五を視よ。一も正面。一も側面。二人も其傍に偶坐せり。汝日々此骨節を視覺え。皆よく意を留よと云。宋茫然と。其言を解り得む。唯日々其下坐臥し居り。夢中のみ西人の人あり。壁下のみ有て。銅人の穴道脈絡を示す。宋豁然

と。悟りぬ。一日老僧遠く出と。宋を留て家を守りむ。菴の前後も悉く虎狼の住所あり。七日を過し。老僧歸て宋に謂て曰。山中檀越の家我を邀て經を誦しむ。汝從ひ往べし。誘ひ出さる。半途より又曰。汝も此止り居て。木魚の聲を聞かば乃來て我を迎よ。と云く。山を越て往ぬ。宋待居る。日影も漸投り。腹も饑る。至是共老僧を尋む。跡を尋て往んと欲す。たゞり往べの河の。河邊小翁と童子二人と河水を汲て居り。師の往し所を問ふ。答て曰。此處人家無し。いんぞ僧を請て經を誦する者ありんと云ふ。已むを得ず。河を渡りて往ぬ。峭壁天を挿まき。往べ道も非也。勿忘木魚の聲。北山の方あり。馳往て見よ。又声南山の方あり。日影暮ぬ。乃

入。上虎百餘出。咆。急。翁。嫗。走。木。柵。石。屋。中。住。鷄。犬。庭。公。初。吐。君。虎。皆。耳。及。睡。覺。視。身。盤。石。上。臥。居。夜。屋。柵。皆。見。驚。馬。在。斯。在。舊。路。尋。菴。返。道。一。人。婦。人。違。井。の。み。を。其。背。を。絡。居。之。を。向。不。跌。傷。其。骨。を。折。ま。り。と。云。宋。其。虎。豚。を。審。一。試。之。を。按。摩。ま。ま。應。婦。人。家。誘。飲。食。を。さ。厚。く。の。を。居。を。求。め。住。人。の。為。按。摩。の。術。を。骨。破。碎。る。者。も。愈。む。と。の。無。久。有。妻。

娶。子。を。生。め。巡。撫。都。御。史。圖。克。善。と。云。人。之。を。重。ん。ト。其。子。の。為。粟。を。大。学。よ。入。と。欲。す。と。宋。受。む。と。人。の。錢。を。受。ず。り。後。福。山。の。王。尚。書。の。第。に。在。り。年。七。十。三。を。成。め。け。る。と。居。易。録。と。云。書。め。ん。え。り。

張谷山

張谷山を頼州の人あり。日々小兒と嬉戲す。人其有道の人とを知らざりけり。張み表兄あり。薊州に往ての身ご帰らざりたる。除女の時表兄が婦。餽飽を製し。先祖を祀く。夫が遠き國に客たるを念く愁ひ歎く。張谷山側み。在。曰。嬖。憂。る。夏。あ。と。吾。嬖。の。為。今。日。兄。の。所。み。主。餽。飽。を。寄。て。信。を。為。さん。と。云。頼。州。の。地。薊。州。を。去。る。

二千餘里の日のまぶさ尋を程さるる已ぬ返り来て云薊の至て兄を
見えたるふ兄恙ありと云姨真とせたりけり谷山懐より家書
をせし又夫の昔の絮衣をせし此のまじ接ありんと云たり是より人
始て其神異を驚き後武當山に入り終る所を都せし二の陶器を
遺したるが盛夏の肉を盛置く腐る事無しとあり

邱生

金陵の邱翁と云人平生善を好む釋氏道人を敬するの篤し
邱翁一子あり書生と成て文名あり年二十成成ぬの時忽ち遍躰骨
痛む方藥聊も效あり久くく身躰漸縮し小く成る日二
寸づ短く成る邱生素長高より數月の後寸餘の人と成

病の如き言を作せし人之を几案の上置茶碗を以て覆ひあり
邱翁も媼ものりせしすを都せし一日道士の形清げあるが門外坐
し數日まら夜無く又托鉢あど乞ふありぬ翁延て招び
之を問へ初め言さるるが再三問はると始めて云君が家異あるの
のりや翁悟り媼を呼出し共々禮拜し子之疾る状を述ぶ道士の
回吾之を知り君が積善のを以て遠くより来ると云茶三緘言
て曰夜深く暗處ゆく自水を取て之を服せしあよ三日の後必驗あり
但燈火をりたるのあり婦人の子に近はると言畢て飄然
と去る翁公翁其教の如く用ひて次の日其子を祝はる教尺たり
長しぬ又心を踏て身長奮のゆくを成る三日の後道士竟ぬ至る

公羽のまろの不思議あり。言三絨を試みる開祝と内計の
 小した人のり。躍ゆく地上の落るる。之を見まどと得るる。生遂
 録むて書し。



奇説排門録卷之十終

